

小学校英語教育におけるhandwriting（書き方）指導について

Handwriting instruction in English lessons at elementary schools

次世代教育学部教育経営学科

細井 健

HOSOI, Takeshi

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部教育経営学科

森下 裕三

MORISHITA, Yuzo

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

要旨：教科としての「外国語（英語）」が小学校高学年に導入されることとなり、次期学習指導要領では「聞くこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」に「読むこと」および「書くこと」を加えた5領域が設定されている。現行の小学校外国語活動では「聞くこと」、「話すこと」を中心に組み込まれてきたが、これからは小学校の発達段階に応じた「読むこと」、「書くこと」の初歩的な運用能力を養うことが求められる。本研究ノートでは、イギリスの英語（母語）教育の中でもhandwriting（書き方）に関する知見を主に援用して、次期指導要領の「書くこと」の目標や内容について考え、その指導法に接近する。

キーワード：小学校外国語（英語）、「書くこと」、ハンドライティング、イギリス・ナショナルカリキュラム

1. はじめに

2014年に文科省より発表された「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」（以降、「五提言」）では、外国語活動の性質から体系的な学習をしないため児童が学習内容に物足りなさを感じていること、中学校において音声から文字への移行が円滑に行われていないことが指摘された。それを受け、小学校高学年で「外国語」を教科として体系的に学習すること、および「読むこと」「書くこと」などの文字を扱った中学校での英語学習との接続することが新しい学習指導要領に組み込まれている。

次期学習指導要領では小学校中学年の「外国語活動」、小学校高学年および中学校「外国語」におけるそれぞれの目標や位置づけが関連づけて示されている。また、小学校中学年の「外国語活動」では「聞くこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」の3領域、小学校高学年および中学校「外国語」ではそれらに「読むこと」、「書くこと」を加えた5領域が設定され、どの領域においても目標が2～3段階に分けられている。小学校高学年と中学校の「外国語」では「…できるようにする」という指標形式となっており、「外国語を使って何ができるようにするか」ということが前面に打ち出されている。

現行の英語教育からの流れを追えば、2011年より5、6年生に必修となった「外国語活動」において、文字は「音声によるコミュニケーションを補助するもの」とされ、「アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめる」と文字は触れる程度の指導であった。2001年に文科省が作成した「小学校英語活動実践の手引き」の中でも「中学校が英語学習で抵抗を示すのは文字」であるとして、「音声と文字を切り離して、音声を中心にした指導を心がけることが大切」と述べられていた。田中（2017）は、文字指導に関して消極的な態度がとられていたことから、小学校で文字を教えると子どもが英語嫌いになると思っている教員が多くいること、どのように指導したらいいかわからない現状や指導要領にはアルファベットの読みの指導およびそれを基点とした「読み」「書き」の道筋が明示されていないことを指摘している。また「文字指導」について「書くこと」や「AとかBとか読み方を教えること」など解釈が一定していないことを述べているが、それは文字学習が様々な技能を必要とする。複合的な行為であることを理解しなくてはならない。

本研究ノートでは、小学校高学年で教科化される「外国語」の「書くこと」の中でも、特にhandwriting（書き方）を中心に上げ、イギリス

や日本の母語教育、およびイギリスの2言語使用児童の言語習得や日本の小学校英語教育の先進的な取り組みから得られた知見をもとに、新学習指導要領にて提示されている「書くこと」の目標や内容を見つめ、指導の在り方を模索していきたい。

2. 次期新学習指導要領外国語「書くこと」の目標

次期学習指導要領における小学校高学年「外国語」の「第1目標ⁱ」では、「書くこと」の目標として「ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができる」ことと、「イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができる」の2点が挙げられている。

「五提言」において、単に中学校で学ぶ内容を小学校高学年に前倒しするのではなく、学校内外の影響を踏まえながら、小学校の発達段階に応じた「読むこと」、「書くこと」に慣れ親しみ積極的に英語を読もうとしたり、書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的な運用能力を養うことが求められているが、それがどのようなものになるかは、今後、実践を多く積み重ね、そこから得られた成果を集約していくことが必要不可欠である。

3. イギリスの初等英語教育

イギリスは1988年の教育改革法(The Education Reform Act)により、教育の抜本的な改革がなされ、基本的な教科についての国共通カリキュラム(The National Curriculum)が設置された。頻繁に改訂や修正がなされているが、目標の大筋や方針、実践内容は現在のThe National Curriculum in Englandにも引き継がれているⁱⁱ。

イギリスでは母語としての英語がすべての教育の基本であると考えられている。伝統的には「話すこと」が重視されるが、就学開始とともに読み書きが導入され、その重要性を増していく(山本, 2012)。「読むこと」では「語の認識」(word reading)と「内容理解」(comprehension [both listening and reading])、「書くこと」では「書き写すこと」(transcription [spelling and handwriting])と「作文」(composition [articulating ideas and structuring them in a speech

and writing])の2側面がそれぞれの技能で設定されている。Key Stage 1・Year 1のhandwritingでは以下のような項目が挙げられている。

- ・ sit correctly at a table, holding a pencil comfortably and correctly
- ・ begin to form lower-case letters in the correct direction, starting and finishing in the right place
- ・ form capital letters
- ・ form digits 0-9
- ・ understand which letters belong to which handwriting 'families' (i.e. letters that are formed in similar ways) and practise these

「正しい座り方や快適で正しいペンの持ちやすさ」、「小文字を正しい向きで、正しい位置から書き始め、終えることに取り組むこと」そして「どの文字が同じ形をしている仲間かを理解し、練習すること」が目標とされている。

Year 2では「文字と文字を連続でつなぎ(join)始めることと、どの文字、どんな状況であれば連続しない方が最適かを理解すること」と自然な流れや適した速度で書くことを視野に入れた内容となっているⁱⁱⁱ。

ナショナルカリキュラムの具体的な実践を支援するものとして1998年より「全国読み書き戦略」(The National Literacy Strategy)が導入され、公立初等教育学校の児童に対して毎日1時間(60分)、週5時間「リテラシーアワー」として英語が授業時間に割かれている。さらに低学年には英語の時間とは別に週に1・2時間ほど「綴り」(spelling)や「書き方」(handwriting)の時間も充てられている。

The National Literacy Strategyでは、Key Stage前のFoundation初期において、handwriting育成における留意点が以下のようにまとめられている。

- ・ Good gross and fine motor control
- ・ A recognition of pattern
- ・ A language to talk about shapes and movements
- ・ The main handwriting movements involved in the three basic letter shapes, as exemplified by; l, c, r

体全体を使った大きな動き(gross motor control)では、リボンをつけた棒を空中でクルリとしながら手や腕の大きな動きを見せたり、子どもたちに空中や友達の背中に文字の形を作らせたり、さらには砂に文字

を書かせるなど様々な取り組みを紹介している。手や指を使った細かい動き (fine motor control) には裁縫・料理・工作を取り入れ、粘土を使って文字を作るなどの器用さを高める活動も行っている。子どもたちに目を閉じて文字を書かせることで文字の動きが強化されるとも述べている。

また 'l' を「長いはしご」、'c' を「丸まった芋虫」そして 'r' を「片腕のロボット」などと名付け、'r' の文字の動きを見せる時も『(ロボットの) 頭からスタートして足まで下りてまた戻って肩から腕へ』など "patter (早口言葉)" を用いて教えることを奨励している (DfEE, 2001)。

イギリスにはナショナルカリキュラムはあるものの教材や教え方は規制されておらず、書き方においてもどのような教材を使い、どのように教え、どのような書体をモデルとして扱うかは各学校や教師に委ねられている。そのような中でhandwritingにおいて先駆的な取り組みをする第一人者がローズマリー・サスーン (Rosemary Sassoon) である。

4. イギリスhandwriting指導

Sassoon (2003) は、公教育の最初からhandwriting (書き方) を系統的に、かつ創造的に教えるべきであると指摘し、教師が文字の基本的な動きを的確に指導することで、多くの子どもたちが後々まで問題を抱えなくても済むことを唱えている。また筆記具の種類や持ち方、姿勢、紙の置き方、適した机・椅子、光の当て方などの環境づくり、また左利き学習者への配慮も非常にきめ細やかである。

書くことを始めたばかりの児童は効果的に基礎を学ぶために、すでにできる児童も退屈しないように、比

較的短い時間で取り組むことを勧めている。また緊張を防ぐために、綴りを考える必要性の無い文字パターンを使用することを提案している。文字がぎこちなくがっかりしている児童に対しては、その努力をほめるべきであり、そのような段階を経ながら学んでいくことで必要とされる視覚技術 (graphic skills) が養われるとしている。

図1はSassoonが示す4つの書体である。文字の形に関しては上の2つは丸く、下2つは楕円形である。上から2番目と4番目のものには "slant (傾き)" がある。

図2は文字の形に関する用語である。4線の一番上まで伸びるものをAscender、一番下の線まで伸びるものをDescender、文字の開始地点まで伸びる線をEntry stroke、基線 (Baseline) で止めずに折り返して終えるExit stroke、そして横棒のCrossbarがある。楕円形で、傾きがあり、Exit strokeがある文字が自然と連続しやすく、「読みやすさ (legibility)」、「流れるような速さ」そして「連続する (しない) こと」という目標を十分に考慮した書体となっている。

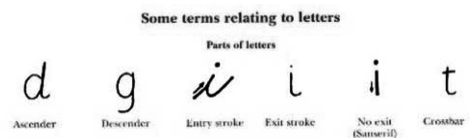


図2 Sassoon (2003) p. 24

図3は運筆が共通している (stroke-related) 文字グループである。1番目のグループは文字が縦の動きをしているもの、2番目は時計回りのカーブを含むもの、3番目は反時計回りのカーブを含むもの、4番目は斜線や向きの変化を含むものである。

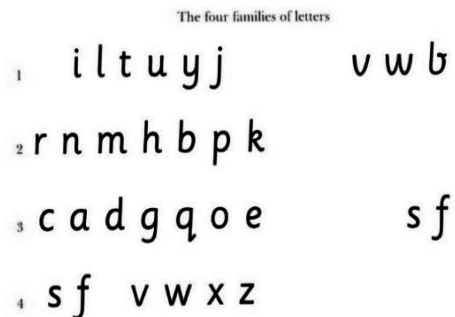


図3 Sassoon (2003) p. 53

図4にあるように、まずiとlを同時に始め、大事な要素である文字の高低を区別する。Sassoonは高低だけに集中したい場合は、iの上の点は次回に取り組



図1 Sassoon (2003) p. 5

むことも良いと指摘する。またtだけ縦の線の高さが他の文字と違うことを確認するために「文字の高さは3種類あって、‘t’だけ中間、だから‘t’はteenager (10代)」という教師の語りを紹介している。

il il il ilt ilt ilt itu itu

図4 Sassoon (2003) p. 55

さらに、第3グループは反時計回りのカーブが含まれるグループであり、cの形を基にした文字の開始点が右上からという共通点を持つ。eだけは開始点まで緩やかな曲線が伸びてから同じ動きをする。図5・6はキャロル・マチェットのhandwriting教材である。文字の開始点から書き始めることと運筆のための練習がある。



図5 “Handwriting Practice 1” p. 9

そして図6は文字と文字が連続してつなぐ(join)ための練習である。図5の文字と比べても傾いている(slant)のがわかる。「読みやすく」、「流ちょうで」そして「スピードのある」書き方の習得が求められる。



図6 “Handwriting Practice 2” p. 7

5. イギリス2言語使用児童の文字学習

イギリスは多言語・多文化社会であり、英語を母語としない、英語以外の言語を使用する子どもが多くいるが、小学校では初めからイギリス人の子どもと一緒に英語を教えている。Kenner (2004) はイギリスの小学校に通う、英語といわゆる継承語(アラビア語・中国語・スペイン語)の2言語を学ぶ5歳の児童たちの「読み・書き」にまつわる調査をし、予想以上に2言語間の言語的な気づき(language awareness)や具体化された知識(embodied knowledges)を身につ

けていることを報告している。コミュニティースクールや兄弟・親類から継承語を学び、またクラスメートに自身の継承語を教える機会の中で、書く方向性(縦横や左右)の違いや連続性(つなぎ)の有無、文字の識別に微妙ながらも大切なポイント(点の有無や線の傾き)などを発言している。異なる言語の書記体系には異なる規則があり、似ているような文字でもそれぞれの特徴を持っていることを認識している。

正確な筆の動きが求められる中国語使用者が比較的自由な筆の動きが奨励されるイギリスの学校で違いに戸惑うことが多いと教師たちも感じているが、調査対象児童は両書記体系それぞれから得られる許容度を理解したうえで、その可能域を広げていると述べている。2言語使用者の児童たちがそれぞれの言語で何が重要視されているのかを気づいていることに加え、彼ら自身の書き方に異なる書記体系同士を、発想豊かにそして柔軟に取り入れられている様子が描き出されており示唆に富む。

また、各言語の授業や学習の様子から、handwritingとは身体を用いた文字との取り組み(physical engagement with scripts)で、視覚(visually)のみならず、口頭(verbally)や運動感覚(kinaesthetically)を使って習得しており、これらの感覚を組み合わせることで学ぶこと(multimodal learning)の効果は絶大であるとまとめている^{iv}。

6. 日本語の運筆指導

下村(2006)は、漢字・カタカナ・ひらがな・数字の運筆について「唱えて覚える口唱法」を提唱している。イギリスの英語教育におけるhandwritingの指導と多くの点で類似しており、非常に興味深い。正しい鉛筆の持ち方と左手の添え方、書きやすい筆記具、正しい姿勢と座り方を教え、空書きや色塗りをしたり、リズムを使ったり、鼻のてっぺんやあごで文字を書くなどの工夫があり、短時間で、量も多くせず、変化をつけ、ほめながら楽しく指導することを推奨している。

ひらがなの「ゆ」の指導では、「雲が モク モクモク」と言いながら雲を描き、雨がザーっと言って〈たてぼう〉を書かせる。♪まあるく うずまき くるくる まわそう と歌って勢いの良い〈渦巻き〉を書かせる。♪きたかぜ びゅう びゅう ななめに びゅう びゅう と歌って最初は〈たてぼう〉のようにして最後は斜めに払わせる。図7がその絵となる。

♪たてをかき、お
おきくまわして
たてぼう ぴゅう
と歌いながら「ゆ」
を書く。その後は手
拍子で空書きし、そ
して「○○ちゃんが
鉛筆になって床に書
いてみよう」と、字形通りにタツタと小走り気味に歩
かせる。



図7 下村 (2006) p. 32

言葉を使う時、身につけなくてはならないのが、言葉を書き表すために必要な文字の「音」「形」「書き順」とその言葉の「意味」や「使い方」であるが、文字指導はその両方を教えるのではなく、「文字の音、形、書き順」であるという下村の説明は非常に的確である (下村, 2006, pp. 86-87)。

7. 日本の小学校英語「書くこと」の取り組み

日本の小学校英語教育の先進的な「読み・書き」指導では、フォニックスの手法が用いられることが多いが、その中でhandwritingに関する箇所を抽出する。

田中 (2017) は、書く指導を行う注意点として、アルファベットの音を聞かせながら書き方のモデルを示し、素早く滑らかに書けるような書き順を教えることを挙げ、書写を通して文字の書き方を学ばせている。加えて空書きやアメリカ手話、歌・体・絵本を使った文字指導を紹介している。また、形を認識しやすい大文字と使用頻度の高い小文字を両方隣り合わせて書かせることを推奨している。Aa, Bb, Dd, Pp, Qqと一緒に並べたものを目にすれば混乱が少なく、Bbを教える時には「右を向いているBb」、Ddは「向かい合っているDd」のように言葉をかけながら教えるとわかりやすくなるとしている。

アレン玉井 (2010) は、アルファベット学習の最も大切なところは文字 (視覚情報) とその名前 (聴覚情報) を一致させることと指摘し、アルファベットにおける指導目標では、大文字・小文字ともに1文字の練習で終わらせず、複数の文字を早く、正確に処理することに十分時間をかけ、特に小文字は徹底的に指導すると述べている。大文字の習得は比較的早くできるものの、小文字に関しては弁別特徴が少なく難しく、自信を持たせるためにも大文字を教えてから小文字を教えている。フォニックス指導は大文字の読み書きが十分にでき、小文字がかなり定着し、音素認識ができた

頃から開始している。

小野・高梨・土屋 (2017) も読み書き能力を一体化させるために有効な方策としてフォニックスを挙げているが、その初歩段階でアルファベットの対する認識を効果的に指導することが鍵であること、そしてFEL環境ではアルファベットに触れる機会が少ないことを指摘している。音声から導入し、音声と文字を統合したアルファベット指導を10分から15分の短時間で、頻度を高めて学習する分散学習を取り入れることを提案している。

中森 (2009) は、音声学習が安定してから文字を導入するのが理想的であるとする。母語では成長過程で音声を習得し、しばらくしてから文字の習得が始まるが、外国語学習では文字に親しむ十分な時間が無いため、文字だけを認識させて、音声と結び付けていると批判する。音声と文字を同時に習得することは、学習者を混乱させ負担を強いると説明し、成功する学習者とならず学習者が必ず出てしまうと訴えている。

8. 小学校英語におけるhandwriting指導

イギリスではどのような文字指導をするかは、学校全体の、また保護者を含めた議題であり、書体のモデルから教え方まで議論されるべきであると考えられている。日本でも、学習指導要領の目標を達成するべく、小学校英語教科書・暫定版 (図8) を見てどのような文字指導が可能か、国語教育のローマ字指導も含め検討が必要である。



図8 『We Can! 1 暫定版 (平成29年9月)』 p. 80

イギリスの英語 (母語) 教育における「書くこと」を学び教えることへの意識は非常に高く徹底しており、環境作りから十分考えられている。特に左利きの学習者への配慮は高く、リラックスしながら書くことができる紙の置き方が示されている (図9)。左利きであれば体の左前に斜めに紙を置くことで、左腕のスペースもでき、手首も曲がらず、自分の文字を見ながら書き続けることができる。これは左から右に流れるように書く英語という言語の特質を考えれば非常に理にかなっており指導に生かすポイントとなる^v。Sassoon (1995) は第2言語体系を習得する際は、異なる文化の哲学を獲得することとなり、さらには異なる

る体の動き、それに伴った異なる考え方も一緒に身につけていると深い洞察力を持って論じている。

小野・高梨・土屋 (2017) は、アルファベット指導は小学校中学年からがふさわ

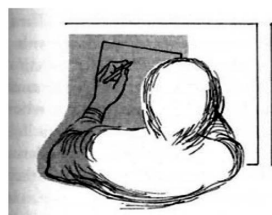


図9 Sasson & Briem (2010) p. 43

しいとしているが、「外国語活動」での目標1(1)聞くことの「ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかがわかるようにする」ことに対して、gross and fine motor (体の大きな動きや手を使った動き)を用いた活動などは文字の識別にも役立つのは勿論のこと、高学年での「書く」活動の基礎として有用であると思われる。また、日本の小学校英語教育においても書体から適切な文字の動きを捉え、グループ分けして指導することが望まれるが、Sassoon (2003) が説くように、書体モデル・傾き・大きさなどの割合に厳密に固執するのではなく、文字の正しい動き、文字の開始点や線の向き、文字の高低などを早くから強調し、技能を高めることが肝要である。さらには、視覚・聴覚といった感覚器官や運動機能を調整しながら取り組む、多感覚の学び (multimodal learning) であることを大いに利用すべきであり、handwritingの動きに合わせリズムや音楽を活用したり、文字の形や動きを表現する言葉、“platter”などを共有する機会は学習する児童にとって有益であろう。

handwritingの大きな目的は手の動きが自動化された、流ちょうな書き手となることであり、書く内容に集中することである (Sassoon, 2003, p. 51)。次期指導要領「書くこと」の目標にある「語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すこと」や、「自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くこと」は、まさにmotor memory (動きの記憶)による自動化が生じ負荷が軽減された状態で、文字と音の関係や語彙・語順を意識しながら書いたり、板書や教科書を見ながら写したり、繰り返し学んだフレーズを思い出しながら表現したりと、様々な認知活動や技能を統合することに他ならない。

母語であれ、外国語であれ一生涯必要とされる「書く」という技能を児童が身につける機会であることを理解して、指導することが大切である。

参考文献

- アレン玉井光江 (2010). 『小学校英語の教育法：理論と実践』大修館書店.
- Department for Education and Employment (2001). *The National Literacy Strategy: Developing Early Writing*. London: DfEE.
- Kenner, C. (2004). *Becoming biliterate: Young children learning different writing systems*. London: Trentham Books.
- 中森誉之 (2009). 『学びのための英語学習理論：つまづきの克服と指導への提案』ひつじ書房.
- 小野尚美・高梨庸雄・土屋佳雅里 (2017). 『小学校英語から中学校英語への架け橋：文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開発研究』朝日出版社.
- Sassoon, R. (1995). *The Acquisition of a second writing system*. Oxford: Intellect.
- Sassoon, R. (2003). *Handwriting: The way to teach it (second edition)*. London: Paul Chapman Publishing.
- Sassoon, R., & G. SE. Briem (2010). *Improve your handwriting: Write in a confident and fluent hand*. London: Teach Yourself.
- 下村昇 (2006). 『ひらがな・カタカナの教え方』高文研.
- 田中真紀子 (2017). 『小学校に英語の読み書きをどう教えたらいいか』研究社.
- 山本麻子 (2012). 『ことばを鍛えるイギリスの学校：国語教育で何ができるか』岩波書店.

参考図書

- “Handwriting Practice 1” (2012). Schofield & Sims
- “Handwriting Practice 2” (2012). Schofield & Sims
- 『We Can! 1 暫定版 (平成29年9月)』(2017). 文部科学省.

ⁱ 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」としている。「読むこと、書くことに慣れ親し(み)」むことや、「音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたり」することなどが育成の新しい構成要素となっ

ている。

- ii イギリスの義務教育は原則5歳から開始し、16歳前後で中等教育修了資格試験（GCSE）を受けて義務教育が終了する。入学後はレセプション・クラス（Foundation）で1・2学期過ごした後にKey Stage 1（5歳から7歳）、Key Stage 2（7歳から11歳）に進む。
- iii Key Stage 2の3・4年および5・6年では、Key Stage 1を引き継ぎ、「読みやすさ」、「流れるような速さ」、「適切な文字の形と連続すること（または連続しないでおくと決めること）」そして「課題に最適な道具を選ぶこと」となっている。
- iv 「書く行為（the act of writing）」をリテラシー教育の重要な役割に据えている国としてフランスやスペインを挙げている。英語では“the graphic act”に相当するフランス語の“*le graphisme*”，スペインで流ちょうに書く能力“*motricidad*”は、英語では“motion skills”に相当するが、両者ともより豊かなものであると説明している。
- v 横・縦書きがあり、直線的な筆の動きをした漢字を用い、文字を中心に配置する日本語は紙の位置は正面にまっすぐ置くことが基本となる。